

NO-MA ニュースレター

2019.8 / VOL.24

ボードレス・アートミュージアム

NO-MA ニュースレター

特別報告 「2019 ジャパン×タイププロジェクト」

展覧会レポート 忘れようとしても思い出せない

ABCColumn アール・スリュットを巡るコラム VOL.14

地域インタビュー あの一ひの近江八幡スタイル

八幡学区第三区自治会長 岩崎 義雄 さん



特別報告



2019ジャパン×タイプロジェクト 障害者の文化芸術国際交流事業

文：木元聖奈(事業担当)

2019年7月19日～11月3日バンコク芸術文化センター (Bangkok Art & Culture Center)

文化庁委託事業「令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業」障害者の文化芸術国際交流事業

主催：文化庁、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会、バンコク芸術文化センター、レインボールーム財団



オープニングを飾った瑞宝太鼓のパフォーマンス



展示風景

「障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会」(事務局：社会福祉法人グロ)は、全国の障害者福祉団体や自治体などで2016年に組織され、これまでにフランスやスウェーデン、インドネシアや国内で様々な国際交流事業を行ってきました。2019年は7月から11月にかけて、東南アジア有数のアートセンターであるバンコク芸術文化センター(Bangkok Art & Culture Centre / 略称BACC)でオール・ブリュット展、パフォーマンス・アート展、日タイの交流プログラムなど多彩な事業を実施します。

7月19日から11月3日にかけてはThailand and Japan ART BRUT - Figure of Unknown Beauty「日本とタイのオール・ブリュット-知られざる美のかたち」と題して、日本の28名、タイの23名による展覧会をメインギャラリイで開催しています。一部は、「生々

しさ」をテーマに多くの作品に見られる傾向から、一部は作品の制作環境に視点を移し、日常の中で営まれている創作であることを素材や技法から見ていく展示としてあります。三部は、創作の源にある作者の思考や願いをテーマごとに展示し、四部では、作品が生まれる背景にフォーカスして、作者とその周囲にいる他者との関係性に焦点を当てました。そして五部では、新たなクリエイションを試みた現代アーティストとオール・ブリュットの作者とのコラボレーションを紹介しています。

BACCはタイのみならずアジア

諸国や欧米の観光客など毎日約

2,000人が訪れる芸術セン

ターで、このプロジェクトをき

っかけにオール・ブリュットや障害

者のパフォーマンスの魅力

がさらに広く知られることになる

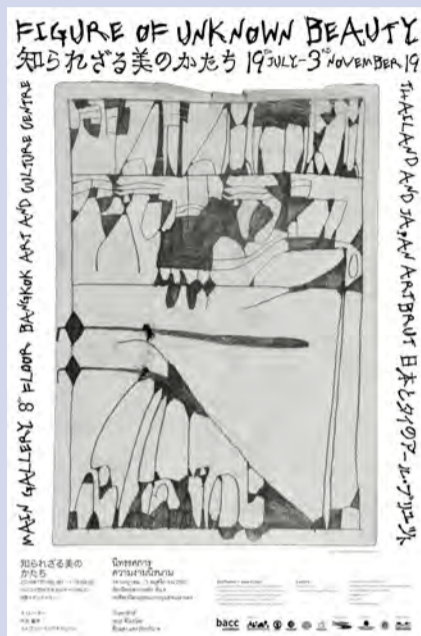
と信じています。



五十嵐英之(出展者)



東本憲子(出展者)



会場内の様子



1階 齋藤勝利作品展示の様子

2019年6月8日、小雨の中、企画展「忘れようとしても思い出せない」がオープンしました。9月8日までの3か月間、この少し風変わりなタイトルの展覧会を開催しています。展覧会タイトルは、夫婦漫才師の「唄子・啓助」の鳳啓助のギャグにちなんだものです。相方であり、妻であった京唄子に対して、鳳が「君の事は忘れようにも……」と言った後、「忘れられない」と締めくくることが予期させつつ、「思い出せない」と裏切ることで笑いを生むものとした。赤塚不二夫もこのフレーズを好み、「天才バカボン」のパパのギャグとして用いていました。忘れようとしても思い出せない——ナンセンスで洒落た言い回しでありつつ、その実、人間の記憶の本質を言い当てている言葉にも思



文：山田創 (本展学芸員)



「忘れようとしても思い出せない」
2019年6月8日(土)～9月8日(日)

えます。些細なことをいつまでも覚えていたり、反対に重要なことをケロッと忘れてしまったり、人間の記憶の不確かさを表す表現として、一見矛盾したこのフレーズには妙な説得力があります。あるいは、言語化できない思念、つまり「忘れようとしても」頭には確かにあるのに、言葉にした途端にすりりと指の間からこぼれ落ちていく(思い出せない)情感も想起させ、そこから発せられる、そこはかとない切なさも漂っていると感じています。本展の出展者の表現は、個人的な記憶、追憶にしか存在しないいつしかの情景、もう手が届かないが確かに存在した他者たち、それらが絵、写真、映像といったメディアに刻まれたものだと考えています。例えば、齋藤勝利が描いた山形県の風景画。彼が通う聾学校の遠足のバスなどで、他の生徒や先生は、齋藤に特等席を用意していました。彼は景色が見えやすいその席で、走る路面、山の連なり、過ぎ去る車などを観察し、それらを再現するかのよう

に描きました。齋藤の作品からは、彼自身の脳内風景そのものを焼き付けているように思われます。また、浅草で市井の人々の姿を40年以上にわたり撮りためてきた「浅草ポートレート」を展開する鬼海弘雄。NOMAの庭と蔵にわたって展示した写真に映っているのは浅草の往来で鬼海と出会った名もなき人々です。決まって浅草寺で撮影されるモノクロームの写真には、その人物の風貌と、鬼海が付けたキャプションのわずかな情報しかありません。しかし、こちらを見つめ返すような肖像たちの佇まいから、私たちはその時、その場所に確かにその人が存在したという事実を味わいます。展覧会を構想するにあたって、こうした作者たちの表現に出会っていくうちに、「記憶」や「切なさ」といった漠然としたキーワードが思い浮かんできました。そして、彼らの表現に添える言葉として、かねてから気になっていた「忘れようとしても思い出せない」というフレーズをタイトルにすることにしました。開催期間は、梅雨から晩夏にかけて。各作者が捉えた言葉にならない情景の数々が詰まった「忘れようとしても思い出せない」は通り雨、蝉の声、路面の陽炎といった刹那的な季節の風情に、よく似合う展覧会になったと思います。



蔵 鬼海弘雄作品展示の様子

意思の確認が困難な作者の 作品を展示すること

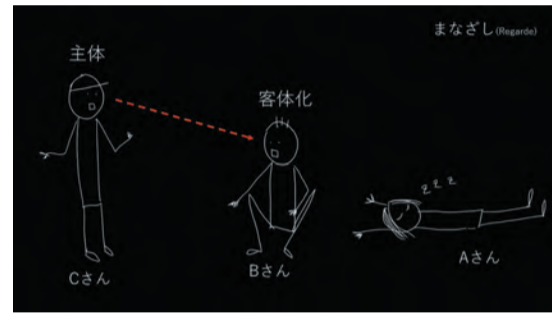
——展示を行う側の動機としての「まなざし」

文：山田創(社会福祉法人グロー)



このコラムでは、NO-MA学芸員が社会福祉法人グロー（NO-MAの運営団体）の研究発表フォーラム（2018/12/2）でプレゼンテーションした内容を再編してコラムをお届けします。

▼プレゼンテーションで使用したスライド



前号では、意思の確認が困難な作者に展示をお願いするにあたり、福祉の世界の概念である「意思決定支援」の考え方を参照することの意義について考えました。

今回のコラムでは、展示を行う側の動機について、つまり「意思の確認が困難であるにも関わらず、その人の作品を紹介したいという動機はなににもとづいて考えているか」ということについて考えてみたいと思います。

私はこの動機を形成しているのは「その人の『まなざし』を紹介したい」ということといえるのではないかと考えています。

この場で、まなざしと書くときに参照しているのは、フランスの思想家、ジャン・ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) の概念です。サルトルは、この言葉で主体と客体の関係を表しています。まなざしを注ぐ方は、関係性において常に主体的な立場であり、まなざしを注がれる方は、客体的な立場にたちます。

たとえば、AさんがBさんを覗き見しているとき、Aさんは主体的で、Bさんは客体的です。ここに、Cさんが現れ、Aさんの覗きを目

撃すると……覗きをしていたAさんはまなざす主体から、一気に、まなざされる客体へと変わり、主客は転換します。

障害のある人は、客体側に立つことが多かったのではないのでしょうか。その振る舞いから、周囲からのまなざしを集めることも多いですし、生活を営んでいく上で様々なサポートを受ける彼らにとって、支援もまた、まなざしを注がれる行為であるといえるでしょう。多くの社会的な関係性において、彼らは見つめられる対象となり、客体化を余儀なくされます。

他方で、まなざし自体は、誰にでもあります。私は障害のある人が作るものには、彼らのまなざしの行方が顕著に見て取れるものが存在すると考えます。

例えば、コミュニケーションが取れず、意思の疎通が困難な人がいるとして、彼が作ったなにかは、彼がこの世界を素材にして、なんらかの意図をもって組み合わせた行なったものです。その意図は読み取ることも出来ず、「一体どうしてこんなものを作ったんだろう!？」と思わせるものも多くあります。そ

れはきっと、独特の経路を辿って世界を見つめるまなざしであると言いつづけることができると思います。そのまなざしの独特さは、美術的に見れば、作家性ともいえるでしょう。

ここに、主客の転換に似た現象が起こっていると思います。それは見つめる対象として思っていた人たちから放たれるまなざしの存在に私たちが気づくということですね。優れた美術作品が、私たちに新たな世界を見せるように、障害のある作者の独創的なまなざしが私たちに新たな世界の見つめ方を提示しています。

無論、そのまなざしを社会に向けて発信することについての当人の意向は丁寧に確認していく必要がありますが（前号のコラムでこの意向確認のプロセスを「意思決定支援」と照らし合わせながら検証しています）、私たちに、このような試行のプロセスが前提として存在していると考えています。

前号 (vol.23) は NO-MA のウェブサイト (以下のページ) よりご覧いただけます。
<http://www.no-ma.jp/?p=17208>



地域インタビュー ohmi-hachiman local interview

偶然の出会い？必然の成り行き？
温かい眼差しで人とNO-MAを見つめる

八幡学区第三区自治会長

岩崎 義雄 氏

文：山口有子(自立生活支援員)



◀所属されていた劇団の機関紙を広げ、当時の様子を語る岩崎さん。

「退職して何をしようかと考えていた時、偶然手にしたボランティア募集チラシがきっかけでした」とNO-MAとの出会いについて語る岩崎さん。当時、アール・ブリュットの展示を目にした感動を手紙にしたためてNO-MAへ投書を送ったという程、その出会いは岩崎さんにとって衝撃的であった。しかし、一見偶然に思えた出会いであるが、今回お話を伺う中で、決して偶然ではなかったことがわかる。

岩崎さんは30代後半から約30年間、看護師として精神科病棟で勤務されていた。そこで、折込広告の裏面にぎっしりと文字や記号等を書き込む患者さんに接した経験があった。当時はそれらを「作品」として見ることはなかったが、鮮やかな色彩や意外な発想に心惹かれたものがあつた。だからこ

そ、NO-MAで作品を観た時、「自分が経験したことだ!」と衝撃が走ったのだと言う。当時のことを思い出し、「彼らは傷つきやすく人懐こくて、あつたかいんだよね」と、少し遠くを見つめる眼差しで語る岩崎さんの表情がとても優しい。

看護師であった岩崎さんが、何故そこまでアール・ブリュットに惹かれたのか？更に過去を遡ると、青春時代を東京の劇団で表現者として過ごされてきたという事実があつた。10代の後半から30代半ばまで所属された劇団は、芸術や文化を大事にし、若者を大事に育てようとする劇団で、「そこで青春時代を過ごしたことは自分の財産です」と断言される。若い頃から文化芸術に親しみ、表現することの素晴らしさを自ら体験されてきたからこそ、病院という場でも彼らの表現に目をとめたのだろう。

現在、岩崎さんはNO-MAから程近

い築200年の町屋に住まれている。風を通し、夏を涼しく暮らすことを一番に建てられたお住まいは、太い柱と厚い壁からなる堅牢な構造で、地震や台風にも強いという。関東に生まれ、東京で青春時代を過ごされたが、近江八幡に来られた時は何の違和感もなかったとのこと。なぜなら、高校生時代に訪ねた法隆寺の百済観音像に大感激し、その頃から関西好きだったから——と聞くと、これはもう、岩崎さんが今ここにいるのは、何か見えない強い力でこの地へと引き寄せられたのではないかとささ感じる。

「NO-MAに出会えたことは幸せです」と語る岩崎さん。現在は、高齢の方の傾聴ボランティアや発達障害の子供たちの支援活動等にも取り組み、今年度の第三区自治会長の業務もあつて、多忙な日々を過ごされている。

「私たちこそあなたに出会えて幸せです」——今まで岩崎さんに出会った多くの人がそう言うだろう。そう、NO-MAも、だ。「NO-MAこそ、岩崎さんに出会えて幸せです」

そう感じた瞬間、家の中をふわりと夏の風が吹き抜けた。趣のある町屋が、「岩崎さんをここにお連れしたのは私ですよ」と言っているかのよう。



◀寛政6年(1794)から13年かけて建てられた岩崎さん宅。大学の研究等で見学希望者も多いという。

あのひとの
近江八幡
スタイル

次の展覧会のお知らせ

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭

「ちかくのたび」 近くにいる知覚、町とアートと旅に出る

舞台となるのは、文化と風情が残る近江八幡市の旧市街地。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAとそこから数百メートルの範囲内の趣ある町屋など6会場に、ジャンルを超えた様々なアートが集結します。

場から場へ。この町とアートを周遊する本展は、私たちの中にある一様でない「知覚」を巡る旅です。多彩な表現が私たちの考えや意識を押し広げるきっかけを与えてくれることでしょう。未知なる魅力に溢れた「ちかくのたび」をお楽しみください。

※本展では、障害の有無に関わらず様々な人たちが安心して展覧会を楽しんでいたけよう、鑑賞ガイドや音声や触覚的なコンテンツなどを充実させることに取り組みます。

2019年9月21日^土~11月24日^日 11:00~17:00

休催日: 月曜日(祝日の場合は翌日)

会場: NO-MAと周辺の町屋など6会場

観覧料: 全館共通パスポート: 一般1,000円(900円)
高大生900円(800円)

一館チケット: 300円

※中学生以下無料、障害のある方と付添者1名無料

※()内は20名以上の団体料金

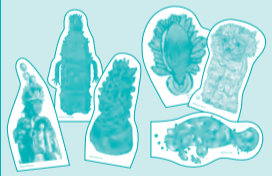
NO-MA関連メディア

NO-MAグッズ

トートバッグ、クリアファイル、一筆箋

アール・ブリュットの作品画像を用いた一筆箋やトートバッグなど、NO-MAの店頭やホームページからお買い求めいただけます。

トートバッグ 1,000円
クリアファイル 380円
一筆箋 380円



2019年9月まで開催中の展覧会「忘れようとしても思い出せない」のカタログとポストカードを販売しています。

カタログ・ポストカード



ラジオ番組

Glow ~生きることが光になる~

アール・ブリュットなど、「福祉」から生まれる様々な表現の可能性について考えるトークラジオ。 ※放送は終了しています

2018年3月に終了したラジオ番組「Glow~生きることが光になる~」のバックナンバーを、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAのホームページからお聞きいただくことができます。過去5年間にわたり、放送してきたすべての回が視聴可能です。ぜひお楽しみください。

<http://www.no-ma.jp/radio.html>



【担当者の編集後記】

開催中の企画展が「記憶」をテーマにしていることから、このところ、自分の幼い頃について思いを馳せることがよくある。それも、この時期に合わせて幼少の夏の記憶を。

姉弟揃って宿題をした夏休みの朝。終わるとオレンジ色の肝油ドロップを1個口にした。壁にはカレンダーの裏面を使った母手製のスケジュール表。地藏盆やプールの登校日の予定が姉弟3人分書き込まれていた。沈めたりせき止めたりして弟と遊んだ、冷たい井戸水に浮かぶ胡瓜や茄子。今のものよりずっと青臭かった裏の畑で取れたトマト。洗いざらしのタオルケットのガラガラした感じ。走って転んで大分県との手書き文字のついた風鈴を見つけて、家族で大笑いした旅行先の土産屋。当然のことながら、父も母も、姉も弟も、その表情は今よりずいぶん若い。忘れたくなくても忘れていき、思い出したくとも思い出せなくなる。ことがある。寄せる年波に抗って、些細なことでも覚えていたとも思う。一方で、何かを忘れていくことには、それまで縛られていたものから解放されたら、心の中に「言葉にできない記憶」という大事な秘密の宝箱を持つような、何か違う次元の豊かさがあるのかもしれないとも思う。

さて、目の前に広がる人生は、今、ここに、このようにしてある。ただそれだけ。過去や未来から自由に、あらゆる可能性を秘めている。そう感じ、年甲斐もなくスキップがしたくなる。

(編集担当 山口有子)

開催中展覧会「忘れようとしても思い出せない」関連イベント

展覧会情報

2019年6月8日^土~9月8日^日 11:00~17:00 休館日: 月曜日(祝日の場合は翌日)

会場: ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

観覧料: 一般300円(250円)、高大生250円(200円)

※中学生以下無料、障害のある方と付添者1名無料 ※()内は20名以上の団体料金

出展者: 岡部亮佑、おうみ映像ラボ、鬼海弘雄、齋藤勝利、田中秀介、西村一幸

トークイベント

「他者のまなざし」

田口ランディさんが語る企画展

「忘れようとしても思い出せない」!

本展出展者の鬼海と交流のある作家の田口ランディを迎え、他者から発せられる強い視線を感じる鬼海の写真作品を起点に、本展についてのトークを展開します。

2019年8月24日^土 13:30~15:00

会場: 酒遊館(滋賀県近江八幡市仲屋町中6)

講師: 田口ランディ(作家)

定員: 60名(要予約)

参加費: 観覧料

※既に展覧会をご覧の方はチケットの半券をご提示ください。

上映会&トーク

「あの時 あの場所 私の暮らし2019」

映像が伝える、昔の暮らし

—誰かの過去の記録に思いを馳せる2時間—

本展でも紹介する「8ミリフィルム発掘プロジェクト」の上映会と、トークを行います。滋賀県で撮影された8ミリフィルムのプライベートムービーを解説とともに見ながら、地域のかつての日々の情景を映し出します。

2019年8月31日^土 14:00~16:00

会場: 旧伴家住宅(滋賀県近江八幡市新町3丁目15)

出演: おうみ映像ラボ

定員: 30名(要予約)

参加費: 観覧料

※既に展覧会をご覧の方はチケットの半券をご提示ください。



これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団」は、2014年4月「社会福祉法人オープンスペースれがーと」とひとつになり、「社会福祉法人グロー」となりました。



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

滋賀県近江八幡市永原町上16

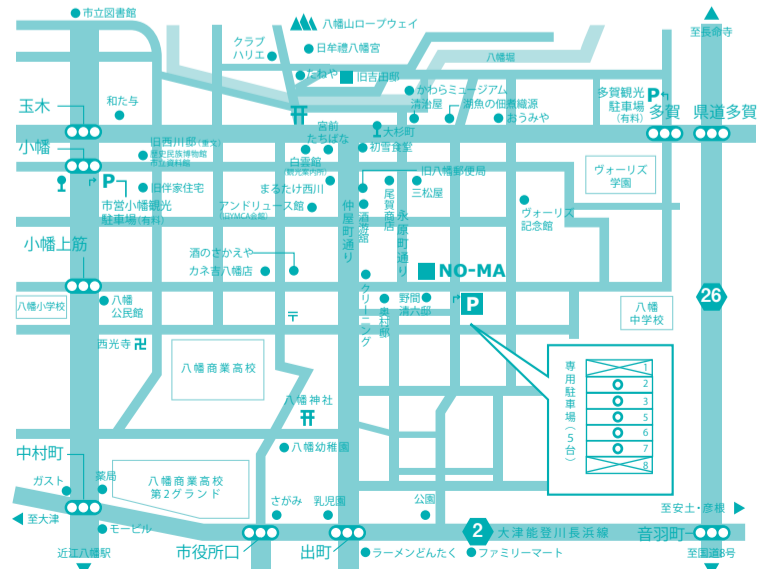
TEL/FAX 0748-36-5018

休館日: 月曜日

(月曜日が祝祭日の場合は翌日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

<http://www.no-ma.jp>



バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町バス停下車 徒歩10分

車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。(計30分)